

権力装置としての運動部活動に関する社会学的研究

—「規律」と「自主性」という教育的技法に着目して—

令和元年度

下 竹 亮 志

筑波大学

(論文概要)

本研究は、戦後から現在までそのあるべき姿を模索する際に中心的な「教育的価値」として議論の対立軸であり続けてきた「規律」と「自主性」に着目し、運動部活動が日本社会においていかなる権力装置であるのかを明らかにしようと試みるものである。先行研究は、「規律」と「自主性」を二項対立的に区別した上で、前者に抑圧されてきたとする後者を教育的価値として理想化し、その具体化のための規範理論を模索してきた。また、理念としての「自主性」が語られ続けてきたからこそ、運動部活動が戦後に拡大・維持されてきたことも指摘されてきた。つまり、先行研究は「規律」を「自主性」の抑圧に寄与するものとして退けるか、その存在にそれほど注意を払わずに「自主性」の機能に焦点化するかのいずれかに偏った議論を展開してきたのである。要するに、「規律」と「自主性」の関係に踏み込んだ分析は試みられていない。

それに対して、本研究はミシェル・フーコーの権力論、統治性論を理論的基盤に、先行研究が「教育的価値」として二項対立的に捉えてきた「規律」と「自主性」を人々の振る舞いを導く「教育的技法」として読み替え、両者の関係性を踏まえた記述を行うことに留意した。このような立場のもと、3章～5章では指導者が著した図書等を資料にした「指導者言説」への歴史社会学的アプローチ、6章と7章ではA高校陸上競技部の事例における生徒の実践への解釈的アプローチから、運動部活動における言説と行為それぞれの水準で「規律」と「自主性」の関係性とその有り様を描いた。以下では、本論における各章の議論と結論を要約的に示す。

第3章では、1975年から1996年までの「指導者言説」を対象に、なぜこの時期に指導者は突如として冗長に語り始めたのかという問いのもと、彼らの語りを検討した。そこには、3つの特徴的な語りを見出すことができる。第1に、三無主義のような生徒の問題が認識されるなかで、「人間教育」としての運動部活動という主題が浮上していたこと。第2に、一方で「自主性」が指導者の課す厳しい練習などの「規律」それ自体に向かって発揮されるべきもの、言い換えれば、自己規律化した振る舞いにおける「自主性」が要請されていたこと。第3に、他方で「規律」一辺倒の指導に限界を感じていた指導者たちは練習と試合を住み分け、前者に「規律」を後者に「自主性」を割り振るという技法に活路を見出したことである。ここには、「規律」と「自主性」の配分という新たな問題設定の発見が

あった。これらを踏まえ、指導者たちがこの時期に図書を通じて冗長に語れるようになったのは、当時の子どもや若者の問題に接続されたからではないかと論じた。すなわち、運動部活動を子どもや若者への不安を埋め合わせる権力装置として描き出していく方向性が、ここでの分析から導き出されたのである。

第3章が、1970年代半ばから90年代半ばにおける「指導者言説」の社会的位置づけとその内容を記したとすれば、第4章は後者の変容について明らかにしたといえる。そこでは、1998年から2013年までの「指導者言説」を対象に、この時期どのような言説が形作られたのか「規律」と「自主性」の配分問題のその後に着目しながら論じた。その結果、両者の配分は練習と試合の住み分けから、日常とスポーツの住み分けへと変化していた。これは、一見すると以前に比べて「自主性」が拡張しているように見えるが注意を要する。なぜなら、「規律」が日常という基底に据えられているからこそ、拡張された「自主性」を語ることができているに過ぎないからである。この時期の指導者は、日常における生活習慣の「規律」を徹底的に説きながら、スポーツで自己規律化した振る舞いにおける「自主性」を求めた。そこでは、厳しさや苦しさを乗り越えた先にある「楽しさ」を感受しつつ、「自立」した人間を育てることが目指されたのだ。これらを踏まえ、「指導者言説」は『『規律』のなかの『自主性』』から『『自主性』のなかの『規律』』を語るものへと変容を遂げたと総括した。とはいえ、ここでの議論のポイントは、それでも運動部活動に根深く居座り続ける「規律」の消え難さである。

第5章では、1990年代後半以降に「指導者言説」が獲得した社会的位置づけについて論じた。この時期、「心の闇」が語られることによって、子どもや若者の理解不可能性が亢進し、大人たちに不安が広がっていた。その時、「指導者言説」は子どもたちに夢と希望を語りながら心の教育を施す場所として運動部活動を肯定しようとしていた。しかし、それ以上に特徴的なのは「指導者言説」が子ども・若者のみならず、彼らを教え導く大人たち自身を問題化していたことである。実際、「指導者一選手」の関係性に留まらず、「親一子ども」、「教師一生徒」、「上司一部下」といった多様な関係性における振る舞いが大人たちに教示されていた。さらには、こうした他者の統治のみならず、自己の統治を学ぶ道具としても「指導者言説」が位置づいていた。その背景には、「生きる力」や「人間力」といった全人的な能力が要請される時代状況もあった。すなわち、「指導者言説」は運動部活動の内部に留まらない多様な関係性における「人間教育」の指針と同時に、「人間であること」の指針をも私たちに授けるようになったのである。

第6章では、A高校陸上競技部において、「自主性」の理念を部員が事実化する過程を記述した。そこでは第1に、厳しい上下関係における部員同士の「パノプティコン」的なまなざしのなかで、「A高校らしさ」を表出する部の伝統に従順な身体が育まれること。第2に、「競技性」を維持していく過程で、「自主性」の理念が部の「規律」と親和的な実践として部員に事実化されること。第3に、規律化の只中で「競技性」の維持をめぐる、部の伝統を自らに利する形へ組み替える部員の実践が存在すること。以上の3点が明らかになった。これらを踏まえ、「自主性」がはらむ両義性のなかに、生徒の自由な実践の可能性があることを指摘した。それと同時に、部員には「自主性」を発揮している側面があるにもかかわらず、「忍耐力」や「我慢する力」といった「規律」の効果をこそ認識してしまっていることも示唆した。すなわち、「指導者言説」と同様、生徒の意識のなかにも「規律」

は手放されることのないまま消え難く根付いているのである。

第7章では、部員を陸上部に留め続ける仕組みについて、怪我を負った生徒、目標を失った生徒に着目しながら記述した。両者に共通するのは、部の伝統を通じた規律化の過程における身体的苦痛と精神的苦痛を体験していることである。一方で、彼らは厳しい練習に伴う身体的苦痛を自ら選び取り、仲間と共に最後までやり抜くことに「楽しさ」を見出していく。他方で、厳しい上下関係に伴う精神的苦痛を下級生は上級生との空間的分離、時間的分離という仕組みを通して緩和、転換する。そして、この過程で陸上部には同学年の仲間との間に「ヨコのつながり」が生まれ、彼らは部に留まり続けるのである。けれども、部員の間には有意義なものとして残り続ける「ヨコのつながり」は、厳しい上下関係という部の伝統の根幹に関わる「タテのつながり」を結果的に支えてもいる。つまり、運動部活動における「規律」は、一見その過程から逸脱している生徒にとっても有意義な体験を形作るからこそ、消え難く残り続けることがここでも明らかとなったのである。

これらの結果を踏まえ、終章では本研究の最大の知見が運動部活動に「規律」が根深く居座り続ける様相を、これまでの研究とは異なる視角から描いた点にあることを指摘した。本研究は「規律」と「自主性」の配分問題を発見し、時代状況に応じてその配分のバランスが変容してきたこと、現在においても両者が不可分な形で生徒の実践に組み込まれていることを明らかにしている。すなわち、「自主性」は決して抑圧されてきたのではなく、むしろ「規律」との関係において常に既に生み出されてきたことを一貫して描いたのである。

けれども、注意すべきは「規律」と「自主性」が決して並列の関係ではないことである。自己規律化した振る舞いにおける「自主性」の有り様に見られるように、「指導者言説」において主流でなかったそれは、近年「楽しさ」が見出されながらよりソフトな形で「規律」による「自主性」の包含を可能にしている。また、陸上部の事例にはそれを具体化する生徒の実践も見取れた。つまり、運動部活動における「規律」と「自主性」の配分の歴史は、前者が後者を巧みに用いつつ、人々の振る舞いを導く教育的技法として洗練されていく歴史であったと言い換え可能である。

重要なのは、このように「規律」と「自主性」が分かち難く結びついてきたことが、日本社会における運動部活動の位置づけを確かなものとしていることである。「指導者言説」の歴史社会学で見たように、運動部活動は常に「人間」の処遇をめぐる「規律」と「自主性」の葛藤を内包しつつ、それが両者の配分を柔軟に変えることで解消されてきた。また、1998年以降の「指導者言説」は、多様な関係性における振る舞いを大人が学ぶ道具として位置づけられるようになった。さらにそれは、他者の統治を学ぶのみならず、自己の生や人生のあり方といった自己の統治を学ぶ道具でもあった。「指導者言説」は、運動部活動に留まらない多様な人間関係や人間のあり方における、「規律」と「自主性」の葛藤をも含み込むことが可能な社会的位置に埋め込まれたのである。

これらを鑑み、運動部活動における語りや実践が紡いできた論理、そこで育まれる心性、思考様式が、日本社会に生きる私たちの不安を埋め合わせる権力装置、すなわち、「人間教育」や「人間であること」の指針を授ける羅針盤として機能していると結論づけた。その上で、そうした社会的位置に埋め込まれるのは、まさに運動部活動がスポーツを「人間教育」として実践する場であることに由来していると論じた。どのような「人間」であるべきか、どのような「人間」を育てるべきかという問いに対して、明確な答えを持ち得ない

時代に生きる私たちは不安を抱かざるを得ない状況にある。そのようななか、「勝ち／負け」という非常に明確なコードを内包しているスポーツは、それを他領域のコードに転換することが可能な制度である。例えば、スポーツは教育システムの「よい／よくない」というコードを「勝ち／負け」というコードに置き換えることで単純化し、勝つための規律訓練がそのまま教育に転化される。だからこそ、スポーツで結果を残した指導者の語りや生徒の実践が有用な「人間教育」へと横滑りし、運動部活動は現代社会を生きる私たちの不安を埋め合わせる権力装置として機能するのである。

しかし、そうであるがゆえに現在の運動部活動は本来それが引き受けなくても良い領域にまで拡張され、社会問題化するほど肥大化してきたと考えられる。従来の研究には、運動部活動で「競技」の論理が「教育」の論理に優先されてきたことを批判する言説の系譜があり、後者を取り戻すべきだという主張がなされてきた。そこで、本質的な価値の中心に位置づけられながら、常にその不十分さが嘆かれてきたのが「自主性」だったといえる。しかし、運動部活動が常に既に「自主性」を生み出しながら、「人間教育」を施す場だったことを踏まえれば、運動部活動に「教育」を取り戻すという主張は単なるトートロジーでしかない。言い換えれば、運動部活動は「教育」が過小なのではなく、あまりにも過剰だったのである。したがって、運動部活動に期待されている「教育」の機能それ自体の縮減が図られる必要があるだろう。

そのためには、まず等価機能比較の視点から運動部活動が担っている機能と等価な領域を「外部」に求めていくことで、それが独自に担うべき機能を評定することが必要である。例えば、第4章で見たように、近年の運動部活動では「規律」の日常化という形で、掃除や挨拶などの生活習慣に対する指導が求められていた。また、陸上部の事例では陸上競技というスポーツそのものではなく、部の伝統への規律化の過程にこそ効果や意味が見出されてもいた。つまり、スポーツを実践する運動部活動でなくとも良い機能が現状のそれには仮託されているのである。けれども、日常の生活習慣や上下関係に伴う敬語などの礼儀、マナーの教育は、家庭や地域、あるいは学校教育全般が担っても良いはずである。この視点に加えて、運動部活動の固有の機能を評定していくもう一つの方途として、そこで実践される「スポーツ経験」の固有性を描いていくことが重要であると指摘した。すなわち、「部活動」一般を論じるのではなく、あくまで「運動部活動」における「スポーツ経験」を描き出し、その固有性を基点に運動部活動の等価領域を逆照射していく試みが必要である。